

軍事史学

第48巻 第4号

巻頭言

軍事遺産と史跡

千田 稔

戦争はなぜ起こるのかという根底的な問いかけに、どのような答えが用意されているのでしょうか。いろいろな説明があるようですが、私を納得させるようなものはありません。私は、人間という動物に与えられた複雑な心理作用を個人で制御できないということに起因する心の弱さに戦争の原因があると考えています。心の弱さが、孤立するのを恐れ、群がります。それが「ムラ」であり、「クニ」という心弱き人間という動物の集団です。集団は、他の集団と区別する原理を持って群がります。例えば民族という血の系譜に求めることもできます。

集団は、領域を持つことによって、心の安寧を求めますが、隣接する他の集団と、集団が形成される原理が異なるならば、領域は、不安定な状態になります。これが、戦争を起こす潜在性となりますから、戦争は、基本的に領域をめぐって展開します。ですから、軍事遺産を明示するのは、領域を区画する境界線と違ってよいと思います。地図を広げると、さまざまな境界線が引かれています、時代は異なるとしても、軍事行動を経たという結果を如実に示すものが少なくないはずです。

最近、群馬県渋川市の金井東裏遺跡かないとうらで、六世紀初頭（古墳時代後期）の火山灰の地層から、鎧を身に着けたままの成人男性の人骨が見つかり、話題をよびました。近くの榛名山二ツ岳の噴火で火砕流に巻き込まれたのではないかと、推定されています。この遺跡の性格については、火山の怒りを鎮めるために儀式をしていたのではないかと解釈もされていますが、私は、北日本に勢力を持つ蝦夷を征討するために、大和から派遣された兵士の拠点という見方もできるのでないかと、思います。群馬県、古代の上野地方が、大和王権と蝦夷の勢力の領域が接する地域だと考えられますので、まさに、私が考える領域原理の違いによるとする戦争の本質をビジュアルに示す遺跡ではないでしょうか。

『日本書紀』などの史料と照合しますと、雄略天皇が、国土を拡大し、天下を治めた時代にあたりと考えられますし、年代的には問題があると思いますが、『古事記』に景行天皇の皇子であるヤマトタケルが東征に向かったと記す状況を彷彿とさせます。

地球上から、戦争をなくすためには、群がらなくとも、一人で生きる力を持つるようになり、人間の心が強くなることだと思えます。そのように考えますと、まだ人間は、心の歴史において、未熟な段階にあり、それを強靱な心を持つ方向に導くのがリーダーの役割であると考えます。

（国際日本文化研究センター名誉教授・帝塚山大学特別客員教授・奈良県立図書館館長）